

天津の中学校に転入した後、高校生となり、奨学金を受けて卒業することができた。小さい頃から医者になろうと思つて勉強してきたが、兄はまだ復員していない、家の経済も見なければならず、進学を断念し、働いた。

今思えば、私達の引揚げ苦勞などは、満州からの引揚者に比べれば、三度の食事を与えられ、持てる物を持ち、家族が一緒になつて帰れたということは、本當に幸せだったと思う。

## 引揚者の見果てぬ夢

東京都 根岸 要 八

私は幼い頃より受けた教育を忠実に守り、義は山嶽より重く、死は鴻毛よりも軽しと覚悟し、困苦欠乏に堪えながら与えられた仕事に努力していた。

八月十五日、チモール島で、終戦を初めて知らされたのであるが、現地軍は戦争継続の意見が大勢を占め、

あわてた中央部は、天皇の特使を派遣して現地軍の説得にあたらしめ、ようやく終戦を決定した。

私は縁あつて昭和九年英領香港の蓬萊漁業公司（後で日本水産株式会社に吸収合併）に就職以来、台湾の基隆、高雄に転勤、最後はチモール島事業所（在チモール島台湾軍経理との備船契約に基き、日本水産チモール島事業所に漁船八隻と共に派遣）で終戦を迎えた。その後不毛の地スパワ島ロポック収容所に監禁され、昭和二十一年五月二十日名古屋港に上陸、沼田市の郷里に帰つた。チモール島派遣時、台湾の高雄市に残置した家族、妻と長女三歳、長男の零歳は無きものとあきらめていたが、帰郷して初めて家族の無事生還していたことを確認した。

チモール島派遣以来、引揚げまで約二年、漁船は食糧輸送（チモール島スラバア間）を担当、八隻全般敵機に撃沈され、終戦監禁後は野草と野生の小動物で生命をつないでいた。

生まれたばかりの幼児を抱えての空襲下の妻子の生

活、疎開、引揚げの労苦は思い出したくないといつて、妻は多くを語らない。

私は高雄出港以来、全く音信不能、妻は役場の兵事係に聞いても状況不明につき、南方地域は玉碎情報ばかりなので、まず生還の望みは無いと回答されたと云う。

それが家族全員無事再会したのだから、飛びついて抱き合せて喜んでもおかしくないのに妻の顔は青白くうつむいたまま、長男は元氣なく、戦時生活の疲労の蓄積が未だ癒えず、狂喜してよろこぶ劇的場面はなかった。

私が台湾の日本に勤務したのは昭和九年十二月で終戦引き揚げまで十一年である。その間、支那事変三年、大東亜戦争で台湾応召二年、チモール島派遣二年で従軍七年、正味会社勤務はわずか延べ四年程度で短い期間であった。

日本一、いな世界に冠たる日本水産ゆえ私は定年まで勤める覚悟で漁業会社で必要な技能を積極的に修得し、会社内における身分地位共に安定し、一家を構え

たので、はりきって会社の仕事に全力を打ち込んでゆく所存であった。

その意味からして、あえて生命の危険な地域であるチモール島事業所派遣を自ら希望し、戦争が順調に進めば日本水産豪州出張所開設をひそかに狙っていたのである。

ところが終戦と共に台湾日本水産は管下全事業所（五十余か所、漁船約百六十隻）はすべて中国に接収され、職場と生活の根拠地を失ってしまった。まったく茫然自失、わが人生進路を失った。

私有財産の没収も決して生易しい被害ではなかったが、会社が残れば、今後の努力次第で挽回可能であるが、日本台湾営業所管下に所有する事業所の諸施設及び漁場の勢力圏は台湾全島はもちろんのこと香港、広東、アモイ、仙頭、海南島、及び南支那海の漁場に及び二度と再び従来のような漁業会社に復元は不可能となってしまうことが私には最大の衝撃であった。

職場を失った、生きる基盤の社会を失った。それに私有財産のすべてを没収された。丸裸にされて帰郷し、

再三転職を余儀なくされた。最後に京王帝都電鉄の傍系会社にたどりつき、二十一年勤めて定年退職した。

その間、何れの職場でも私が青春に生涯の職場として選んだ、漁業会社で精魂こめて修得した多くの技能と資料は、ただの一度も利用されることなく、私が五十八年前に持参していた古いトランクの中でいまだに眠り続けている。

私の青春の夢はむざんにも打ち砕かれてしまった、見果てぬ夢であろうか。

## 星は流れて

鳥取県 仲津 定 義

両親を中学卒業前になくした私は官費で学べる学校の一つとして台湾師範に入学した。自分の将来は誰にも頼らず、自分で切り拓こうと決意したものの渡台旅費に困った。しかしよくしたもので兄嫁が「内緒だよ。」と三十円くれてほっとした。

・石をもて追わるる如く台湾へ流れんとして故郷出で行く

・悲しみは父母なき我を冷たくもひとりで生きよと兄の言えるも

師範卒業後、彰化市公学校に赴任、途中足かけ四年、応召により島内警備に当った。二十年九月除隊、疎開中の妻を迎えて銃弾のあつた住宅で生活した。ところが十月初旬、日本人教師に出勤しないでくれ、学校は中国語で授業することになって日本人は不要と言いはされた。日本人教師はとまどったが、台湾人の中に過激な一部の人が仕返しと稱して暴力沙汰に及びはせぬかと不安をいだいた。事実駐在所員は所在不明になった人もあると聞いた。

昭和二十一年春、ちよつと家をあげた間に衣類や引揚後のためにと貯めた金財産を盗まれてしまった。当時私は運送店に日雇仲仕として使われ、ようやく糊口をしのいでいたが、盗難は大きな痛手となった。

三月中旬のある日、私達は引揚列車に乗った。衣料三点、砂糖は一人三斤等と細かい通達があつたが、誰